
仮面をつけている男

風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面をつけている男

【著者名】

Z4558X

【作者名】

風雅

【あらすじ】

どこにでもいそうな普通な男の祁答院罪徒。だがその男は何故か毎日顔に仮面をつけている。しかもその理由がキャラ作りのためといふ。そんな男が箱庭学園でいろんなことに巻き込まれる話。

第1話／え？仮面をつけている理由？只のキャラ作りだけ

ヤツホー、祁答院罪徒だよ！僕は今病院にいるんだ。

別に病気でもないんだよ、どいつも異常性を調べる病院らしいんだよ。なぜ僕がここにいるかと云ふと僕の成長速度が速いからなんだ。

一歳なのに早く歩きだし、早く言葉を喋りだしからなんだ。それで異常すぎる

成長速度に親が疑問を持つて僕をここに連れてきたらしいんだ。今僕の

隣には男の子と女の子が座っている。

「『人間は無意味に生まれて』」

「『無関係に生きて』」

「『無価値に死ぬに決まっているのことを』」

隣にいる男の子が喋り始めた。てか、男の子が持つてゐるウサギの入形ボロボロになりすぎでしょ！？そつか！きっとこの男の子は物を大事にしているからこんなにボロボロなのか。

「『やみはじつ思つて』」

「『え～と』」

「『めだかちゃんじやることへん』」

おや、名前を呼ばれたぞ、よしその質問に答えてあげよう。

「僕は意味を持つていらない人はいないと思つよ。だって人は何らかの意味を持つて生まれるんだよ」

僕が自分の考えを言つと男の子はひつひつと笑つ。

「『はは、君はおかしいね』」

「『それとなんでざことくんは何で仮面をつけているんだい?』」

そう、僕は病院に来てからずっと顔に仮面をつけているのだ！

「仮面をつけている理由はね、ただのキャラ作りだよーあと、君の名前を教えてくれよ

「『本当に君はおかしいね』」

「『僕は球磨川禊つていうんだよ』」

どうやら男の子は球磨川禊といつひじこ。僕があだ名を考えていると球磨川君が呼ばれた。

「『残念』」

「『もう少し君たちと話たかったんだけどね』」

「『まひちゃんー』」

「『まひちゃん?』」

「さうだよ球磨川君のあだ名だよ。僕たち友達だよね？」

「『僕に向かつてそんなこと言つたのは』」

「『君が初めてだよ』」

「『あとあだ名を考えてくれてありがと』」

僕はくまちゃんにありがとうと言われて嬉しかった。

「『けど、やいとくん』」

「『君は間違つてゐる』」

「『だつて世界には目標なんてなくて』」

「『人生には目的なんてないんだから』」

そういうとくまちゃんは大人の人に導かれて消えていった
そのとき、ウサギの人形が引きずられていた。あれー? あの人形
大事にしてるんじゃないの!?

横にいる女の子は呆然としていた。

「次の子、来てください」

どうやらくまちゃんの検査は終わつて僕の番らしい。
中に入ると。

「「」とにかくまちゃんの検査は終わつて僕の番らしい。
あれ? 僕の目の前に何故か幼女がいる。まあいつか。

「はい」

「よろしく。私の名前は人吉瞳よ。罪徒くんはどうしてここに

「来たかわかる？」

「全然わかりません」

「君はどこかが異常なのよ。それで、社会に出ても大丈夫のようになるために

ここに来たの。

だから異常か調べさせてもらひつわね？」

「はい」

それからいろいろな機械に入れられて検査した結果。どうやら僕は異常だつたらしく病院に通院することになった。あと、新しい友達が増えたんだよ！」

名前は人吉善吉ひやうやら瞳先生の息子らしいんだ。

あれから何日かたつたがどうやら僕の親は僕が異常と知ると僕を売つたらしい。

まったくひどい親だねー今日は僕の新しい親が来るらしいんだ。

「君が罪徒くんですか？」

「…………おじいちゃん誰？」

「ああ、すいません。私は不知火袴と申します。罪徒くんは今日から私の息子になりました。ですが、名前はそのままにしておいてください。

なつました。ですが、名前はそのままにしておいてください。

「わかりました。袴おじいちゃん

「それでは、私の遊びに付き合ってください。

袴のおじいちゃんがそう言つと、僕にサイコロを渡した。

「JRのサイコロをどうするの？」

「ああ、やつ方がわかつませんよね。このサイコロ振るだけですよ

僕がサイコロを振ると落ちたサイコロが同じ面で積み上がった。

「これは素晴らしいですよー！罪徒くんー！」

袴おじいちゃんは何故か喜んでいた。

「袴おじいちゃん用はこれだけ？」

「はい。用はこれだけですそれではまた

よしー袴おじいちゃんの用は終わつたらしいから
善ちやんの所に行こう。

「ヤツホー善ちゃん！」

「あ！罪徒くん！また来てくれたんだ！」

善ちゃんの隣で女の子がパズルを解いている。確かあの子は黒神め
だかちやんだつたけ?

「全部解いてやつたぞ」

どうやらめだかちゃんはパズルを全部解いたらしい。凄いね！

みは さわらるる おきに三品魚したまひ

「…………す」「くなんかない。それです」「くたつて何にもならない。私が生きていることに私が生まれたことに何の意味もないのだから」

「僕はこの世に意味がないものなんてないと思うけどなー?」

僕はめだかちゃんに話し掛けた。

貴様は確か祁答院罪徒だつたな」

「もうだめーちゃん！」

「…………めーちゃん?」

「めだかちゃんのあだ名だよー。」

「…………そんないと、私に教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた?」

必死に考えたあだ名をそなこと扱いするなんて……ショックだ・・・

「そうだなー。めーちゃんは善ちちゃんを嬉しい気持ちにしてくれたんだ。きっとめーちゃんはみんなを幸せにするために生まれてきたんだよー。」

僕がそつまつとめーちゃんが泣き始めた。

「あ~。罪徒くんがめだかちゃんを泣かせた~」

「えつ。僕が悪いの?めーちゃん泣かないでよつ い棒あげるからー!」

また、新しく黒神めだかちゃんが友達になった。

第1話／え？仮面をつけている理由？只のキャラ作りだけど（後書き）

次回は主人公設定に行きたいと思います。

主人公設定

祁答院 罪徒
けどういんざいて

容姿

身長175cm 体重55? 髪の色は黒 目の色は黒。

顔はイケメンではなく男の娘。

性格

人懐っこい

優しい

設定

キャラ作りのため毎日仮面をつけていて、持っている仮面の数は50個ぐらい。

半袖を妹のように可愛がっている。趣味は仮面を集めること。
友達とかにはあだ名を考えて勝手にあだ名で呼ぶ。

異常性

十面十色

自分がつけている仮面の力が使える。（例 犬の仮面をつけると嗅覚が犬と同じぐらいになる）

大掃除
イレイザー

身体に触れているあらゆる物を消す。通常は触れている部分だけが消える。

強く発動させれば触れている部分を伝わり、触れていない部分も徐々に消えていく。

過負荷

エスケープゴート
避難指定

危害をあたえられる瞬間に別の物体と自分の位置を交換する。

七つの大罪セブンクライン

罪との人格とスキルが変わるが罪徒が持っているスキルが使えない
ようになるが
十分間しか使えない。

主人公設定（後書き）

次回は不知火半袖と会う話です。

第2話／何故か罪徒兄つて呼ばれるやつになつた（前書き）

作「どうも～作者で～す

罪「どうも～罪徒で～す」

作「めだかボックス1・2巻をひさしひ買えた～！」

罪「おめでと～」

作「ありがと～。まあそんなこ～んなで」

作・罪「第3話お楽しみください～！」

第2話／何故か罪徒兄つて呼ばれるよひになつた

小学三年生になつた祁答院罪徒だよ。

僕は今日は袴おじいちゃんが理事長をしている箱庭学園に呼び出されたんだ。

今まで連絡が無かつたのに急に呼び出して、何の用だろ？

コンコン

「失礼します～。袴おじいちゃん僕になんのよひ？」

学園長室にノックして入る。

「まあ座つてください。罪徒くん」

僕がソファーに座ろうとしたらその向かい側に大量な食べ物を食べている
女の子がいた。

「・・・誰？」

僕は女の子の向かい側のソファーに座つて、袴おじいちゃんに聞いた。

「ああ、この子は不知火半袖、私の可愛い孫ですよ」

へえ～、袴おじいちゃんの孫なんだ。

「あひやひや…よりしくね！罪徒兄^{にい}」

何故か僕は袖ちやんの義理のお兄ちやんになつたみたいだ。

「ひひひひひひひひひひ！」

「ここみ」

「袴おじこちゃん僕を呼んだのはこれだけ？」

「はい。今日は袖ちやんを紹介したかっただけです」

「ねえねえ。何で罪徒兄は仮面をつけているの？」

初めて会つた人によくこの質問されるな。

「仮面をつけている理由かい？それはねキャラ作りだよ

「あひやひや！罪徒兄はおもしろいね」

何故か仮面をつけている理由を聞くと皆、呆れるか笑うがなんだよね。

「本当に罪徒兄の素顔を見せてくれるの？」

「本当だよ。じゃあ仮面を取るよ」

僕は仮面を取つた。

「え？・・・・・女の子？」

袖ちゃんが僕の素顔を見ると女の子と想つたらしく。
まあ、僕の素顔は女顔だから勘違いもするか。

「違うよ袖ひちゃん。僕は『男の娘』だよ」

「じゃあ、罪徒兄が素顔の時ときどき罪徒姉つて呼んでいいっしー。」

おこおい。袖ひちゃん男の子にお姉ひちゃんなんて傷つくな～。
まあ、楽しそうだからいいか。

「いいよ～。でも、余り僕仮面外さないよ。それと袴おじこひちゃん。
僕を呼んだ理由はこれだけ？」

「それと、箱庭学園に入学した時の要求でも聞こといつかと思こま
して」

「要求つて例えばどんなこと?..」

「例えばクラスとかですね」

クラスか～、どこのどもいにいけどな～。

「できたら袖ひちゃんと同じクラスがいいな～

「わかりました。今日はこれだけですから帰つていこですみ

「それじゃあ、袖ひやんと袴おじこひゃんバイバイ

僕はそのまま家に帰った。

第2話／何故か罪徒兄つて呼ばれるやつになつた（後書き）

作「次回は中学生まで飛ばしたいと思ひます」

罪「感想等お待ちしております！」

作・罪「それでは皆さへ、また来週～」

第3話／変人つて結構ショックだよね・・・（前書き）

作「ヤツホー。作者で～す」

罪「どうも～。罪徒で～す」

作「今田は雨だね～。雨の日つてなんだか気分が沈むよ」

罪「だよね～」

作「まあ～雨に負けないではりきって行きましょ～」

作・罪「それでは皆様、第3話お楽しみください～！」

第3話／変人つて結構ショックだよね・・・

やあ。中学校に進学した祁答院罪徒だよ。

だれか知り合いはいないかな~っと探していると・・・
あれはもしかして・・・善ちゃん？喋りかけてみようか。

「すいません~。もしかして人吉善吉くんですか？」

僕が聞くと善ちゃんぽい人がこっちを向いた。

「なんだよ？あれ・・・もしかしてその仮面お前罪徒か？」

よかつた！善ちゃんだ！でも善ちゃんが間違ったデビューしてゐるよ。
なんだいそのオールバックと学ランつてショックだよ・・・。

「そりだよ善ちゃん！久しぶりだね！」

「久しぶりだな罪徒！」

待つてよ善ちゃんがいるといふことは・・・

「ねえ善ちゃん。善ちゃんが此処にいるといふことはめーちゃんも
此処にいるのかい？」

「めーちゃん？ああ、めだかちゃんの」とか。もちろんいるぜ」

「やつぱりか~。懐かしいな。そもそも教室に戻らないといけない
な。善ちゃんまたね！」

「ああ。またな

どおやじり僕と善ちゃんはクラスが違つたりして。
そのまま放課後まで時間がたつて。

放課後

やつと終わった。よし暇だから善ちゃんに会いにでも行こうかな
?と

僕が考えていると・・・

「『あれー?』」

「『何処にいるんだるー?』」

久々に聞いたことがある声がする。確かにこんな括弧づけた喋り方をするのは
くまちやんしかいないなどなーと思つて、声がした方向に向ふと・
・・・

「『あはっ』」

「『いたいたー』」

「『ヤツホーー』」

「『罪徒くん』」

やつぱつと叫んでいた。それにしてもくまちやんも久しぶりだなー。

「久しぶりだね／＼まひちゃん。／＼まひちゃんは全然変わらないね

「『変わらな』のはお互い様だよ』」

「『罪徒くんも仮面をつけたままなんだね』」

「わかったよ。これがないと地味なキャラの僕は目立たないからね。それで

僕になんか用事でもあるのかな?」

「『僕』」

「『生徒会長選に出るんだ』」

「『だから』」

「『手伝いと役員を頼みたいんだ』」

「うへん。役員か～まあ暇だからいいか!

「わかったよ。手伝いと役員をやるよ」

「『ありがとう』」

「『罪徒くんは優しいな』」

「用事はこれだけでいいの／＼まちちゃん?」

「『うん』」

「『用事はこれだけだから』」

「『もう戻るよ』」

よしー／＼まちちゃんの用事も終わったし善つせんとめー／＼せんに行こう

と黙った瞬間に善つせんとめー／＼せんがいた。

に行くか!

「あ、善ちゃんー！めーちゃんー！」

僕が一人の名前を呼ぶと「人がこっちを見た。

「罪徒ではないか！久しぶりだな！」

「久しぶりだね！めーちゃん！今から帰るんだけど一緒に帰らないかい？」

「それはいいなーじゃあ一緒に帰りつぜ」

善ちゃんとめーちゃんと一緒に帰る途中で生徒会の役員をやるの」と話をしたら

応援されたよ。でも一年生で役員って大丈夫かなー？

二ヶ月

新生徒会のメンバーの挨拶のために、みんな体育館に集合した。生徒会役員の顔合わせは今回が初めてなのだ！いつたいどんな人がいるんだろう〜？

「・・・庶務 阿久根高貴・・・・」

無愛想に挨拶するのは阿久根高貴先輩らしい。高貴だから・・・こうくんでいいか！

「僕は会計の黒神真黒。よろしくねー！」

黒神つてことはめーちゃんのお兄ちやんか。そつだなー真黒だから
まーくんだ!

あだ名を考えていると次は僕の番りしこ。

「じゅわ～。書記になつた。一年の祁答院罪徒ですーよろしくね～」

「副会長の安心院なじむだよ。親しみを込めて安心院さんと呼んで
ね」

にこやかに挨拶する安心院さん。安心院だから・・・あーちゃんで
いいか！

「『はじめまして』」

「『この度生徒会長になつた』」

「『球磨川禊です』」

「『よろしくね』」

挨拶が終わつたから五人で生徒会室に移動。
暇だから他の役員の人を見るか。

「・・・なんだ?」ギロツ

「わっー。

見てたらじゅわくんに睨まれた！

「なんでもないよ。じゅわくん

「・・・・・チツ」

ふう～。怖かつた～。今度はあーちゃんと話してみるか。

「初めまして！あーちゃん！僕は祁答院罪徒って言つんだ仲良くな
てね！」

「ほめたこそよろしくね罪徒くん。でも僕のことは親しみを込めて
安心院さんと呼んでね。

それと、何で罪徒くんは仮面をつけているんだい？」

「できるだけ呼べるよつて努力するよあーちゃん。それはねキャラ
作りだからせ」

「君はおもしろいね。それと安心院さんって呼んでくれないんだね」

やつぱり。あーちゃんはいい人だつたな。よし！次はまーくんに
挨拶するか。

「ほんにちはまーくん！僕は祁答院罪徒つて言つんだよろしくねー！」

「君が罪徒くんかめだかちゃんから聞いてるよ

めーちゃんが僕の話をしているのか。一体どんなことを言つて居
るのか聞いてみよう。

「どんな風にめーちゃんは僕の事を言つてますか？」

「わうだねー。一言で言つたら仮面をつけた変人つて言つてたよ

僕はそれを聞いて地面にひざがついた。・・・・ショックだ友達か
ら変人つて言わると。

「・・・・・ そうですか・・・・・ 変人・・・ですか・・・」

「でつ・・・でも! 変人だけ優しい奴つて善吉くんとめだかちゃんも言つてたよ!」

「変人は決定なんですね・・・」

まあいろいろあつたけど役員の人たちはおもしろいな。でも変人つて言われて超ショックだ。

第3話／変人つて結構ショックだよね・・・（後書き）

罪「めーちゃん達、僕の事変態だと思ってたんだ・・・」

作「まあ、元気出せよ。ガリガリ君あげるから」

罪「え！いいのー！」

作「はやっ！ それでは皆さんさよなら～」

第4話／仕事しない生徒会つらひつら思ひへ～（前書き）

作「やつてまつましたー第4話ー」

罪「イエーイー・パチパチパチ！」

作「よつしゃあーーそれじやあ始めるغاーーー」

罪「おおーー」

作・罪「第4話題を楽しめばだれかー」

第4話／仕事しない生徒会つらひつ思ひへ~

僕が生徒会に入つて何日がたつたけど・・・

「やつぱりめだかちゃんはいつ見てもかわいいな~」

まーくんは毎日めーちゃんのアルバムを見てるよ。

「『あはは』」

「『やつぱりじャンプは面白いな~』」

生徒会長のくまちやんは仕事もしないでジャンプ見てるし。

いづくんは何を考えているんだろう?

いつも部屋の端に突つ立つて変なの~。

「・・・・・」
「じー

あーちゃんは何故か僕の事をずっと見てるから怖いんだよな~
もしかして・・・僕がいつもつけている仮面じゃなくて新しく
買った

仮面をつけいる事に気づいたとか!~ふわあ~、急に・・・眠たく
なって・・・きた。

あれ？ 眠つてたみたいだ。しかも放課後まで眠つてたよ。

「おはよう。罪徒くん」

あれ～。なんであーちゃんがいるの？

「もしかして、あーちゃんは僕が起きるまで待つてくれたのかい？」

「さうだよ。だって僕と君は友達だろ。それに君に用事があるからやつぱりあーちゃんはいい人だ。こんな人と友達になれるなんて嬉しいな～。」

ね

「それと僕に用事つてなんだろう？」

「罪徒くんは面白い能力を持つてるよね？」

「面白い能力？ なんのことだろ～。もしかして『あの』能力のことかな？」

「やうだよ。僕にその能力をくれないかい？」

そう言つて、あーちゃんが僕の仮面を取りうとしてきたが僕は避けた。

「勝手に仮面を取らないでくれよあーちゃん。それに心を読まないでよ。」

あーちゃんには『あの』能力は使えないよ

『あの』能力は僕にしか使えないからね。他の人が使つたらどうなるか分からぬよ。

「罪徒くんにしか使えないのか。じゃあしおりがないね、諦めるよ」

「用事はこれで終わりかいあーちゃん?」

「うん。僕の用事はこれで終わりだよ、球磨川君に大事な用事があるつい呼ばれたからね」

「へえ〜。じゃあ僕は帰るとあるよ。じゃあね〜」

「うん。またね」

くまひやんがあーちゃんに大事な用事があるから呼ぶなんてもしかして告白!?

まあそれはないか。と僕が道で考えていたら・・・・・

ブ〜〜〜〜〜!!

とクラクションの音がしたから見てみると青信号の横断歩道にトラックが女の子を轢かれそうになつてゐる!?

「やっぱー早くあの女の子を助けないとー」

僕は走つて女の子をトラックの進行方向から外した。
トラックはそのまま走つて行つた。

「あれ?」

「大丈夫かい？えっと・・・」

「助けていただきありがとうございます。自分は鰐塚処理と申します」

「何でこの子軍人みたいな口調なの？」

「よかったです。僕は祁答院罪徒ついでにいたんだ。よろしくね鰐塚ちゃん」

「いわいわよろしくあります。罪徒殿」

「それじゃあ僕はもう帰るから今度は涙をつけるんだよ鰐塚ちゃん」

「そのまま僕は家に帰った。てかこうくらがめーちゃんに改心されたらじい。

／鰐塚処理 Side

私はいつも通りに青になつた横断歩道を渡つていると

ブ~~~~~！

とクラクションを鳴らしてトラックが突っ込んできてる。私は「ああ、死んだな」と

考へているが、私はいつのまにかトラックの進行方向から外れていた。

「あれ？」

「大丈夫かい？えっと・・・」

何故か顔に仮面をつけている男の人が聞いてくる。どうやらこの人が私を助けてくれたらしい。

てか何でこの人仮面をつけているんだろう？

「助けてくれてありがとうございます。自分は鰐塚処理と申します」

「よかつた。僕は祁答院罪徒って言つんだ。よろしくね鰐塚ちゃん
どうやらこの人は祁答院罪徒殿と言つひじい。

「いや、もうじくあります。罪徒殿」

「それじゃあ僕はもう帰るから今度は気をつけるんだよ鰐塚ちゃん

「そつ言つて罪徒殿は帰つてしまつた。祁答院罪徒殿か・・・

「また会えるといいな」

第4話／仕事しない生徒会つらひつら（後書き）

作「鶴ひやん出たー！」

罪「だからあんなにテンションが高かったのか」

作「しかもこれフラグ立ったんじゃね？」

罪「マジでー？」

作「それでは嘘をつくな～」

第5話／男の子にかわいがって心にグサツと来るよね？

「あれ？」

確か僕は家で寝たはずなのに、中学の教室で自分の席に座っている。

「やあ。罪徒くん」

「え？ 何であーちゃんが此処にいるの？」

「それはね僕の一京の一のスキル『アリバイプロック脇罪証明』で罪徒くんの夢の中に来たからだよ」

「へえ。それで用事はこれだけなあーちゃん？」

「今日、球磨川くんに顔剥がされひやつた」

「ええ。そんなグロい事笑顔で言わないでくれよ」

まさかの告白じゃなくて顔剥がすつてくまちやんはグロい事をするよまつたぐ。

「それとね。僕の秘密を罪徒くんに教えてあげようと思つてね」

あーちゃんの秘密ってなんだろう？

「僕はね罪徒くん。7932兆1354億4152万3222個の

アノーマル異常と、4925兆9165億2611万

643個の過負荷。計1京2858兆519億6763万3865

マイナス

個のスキルを持つ平等な人外で『悪平等』^{ノットイコール}なんだ。罪徒くんも入るかい？」

「へえ〜。あーちゃんは人外なんだ初めて知ったよ。それとその『悪平等』だっけ？それには入らないよ」

「そりやあ今言つたからね。罪徒くんは『悪平等』に入らないのか悲しいよ」

「普通に『『悪平等』に入らないかい？』って言われて『いいよ』ってすぐ言つわけないじゃん。

「入るわけないじゃん。なんか怪しいし。あーちゃんの秘密を聞いたから変わりに僕の素顔を見せてあげるよ。そして、『あの』スキルの事も教えてあげるよ」

僕の素顔を見せるのは僕が心から信頼してるか惚れてる人にしか見せないんだよ。

「怪しこいつひどいな〜。それと僕は信頼より罪徒くんの惚れてる人の方がいいな〜」

「心を読まないでよ。じゃあ、仮面を取るよ

僕が仮面を取つてあーちゃんに素顔を見せると・・・

「罪徒くんの素顔女の子みたいでかわいいね」

「男に『かわいい』なんて言わないでくれよあーちゃん。それにあ

一ちゃんの方がかわいいよ

「ストレートによく話すよ。……でもそんな所に惚れたぜー。」

「いつ言って、あーちゃんが僕にキスをしようとしてくるが僕はそれを聞一髪で避ける。

「急にキスしようとしないでよー前を言つたけど『あの』スキルは僕にしか使えないんだよ」

「やつてみないと分からぬじやないか。それでそのスキルを教えてくれないか?」

「そうだね。『あの』スキルの名前は『七つの大罪』って言つスキルだよ」

「ふうん。あ、そういえば今日女の子を助けたらしね

「何で。あーちゃんがその事知ってるの?もしかして知り合い?」

「まあ、知り合いみたいなものだね。おや?そろそろ時間らしく

「時間?何の時間なの?」

「罪徒くんが起きる時間だよ。それじゃあお別れのキスでもしようつじやないか」

「スキルもあげないし。僕のファーストキスもあげないよ。じゃあーちゃん」

「うーん。もう行っちゃったかー」

誰もいない教室で安心院は、呟く。

「生憎と僕もファーストキスなんだよね。僕は罪徒くんに惚れてる
らしい・・・・・

だから、何時か罪徒くんに捧げてあげるよ」

第5話／男の子にかわいって心にグサツと来るよね？（後書き）

作「安心院さんにもフラグを立てました～」

罪「マジで」

作「マジマジ。次から頑張れ～」

作「ついでに罪徒のスキル『七つの大罪』は鋼の鍊金術師から取りました」

罪「他人事だと思って、それでは監さんをよつな～～」

第6話／自分が欲しい物が買える時って何故か邪魔に入る（前書き）

作「作者です！」

罪「罪徒です！」

作「やつてまいりました！第6話！」

罪「やつと高校生だね～」

作・罪「それでは畠さん、第6話お楽しみください～！」

第6話／自分が欲しい物が買える時つて何故か邪魔に入る

『世界は平凡か？』
それは人それぞれだな～。

『未来は退屈か？』

退屈じやない方がいいな～。

『現実は適当か？』

適當かもしれない。

『安心しろ。それでも生きる事は劇的だ！』

やつぱりめーちゃんはすげーにな～。感動しちゃつた～。

『そんなわけで本日よつこの私が貴様達の生徒会長だー学業・恋愛・家庭・労働・私生活に
至るまで24時間365日私は誰からの相談でも受けつけるーー。』

相談を受け付けるか？。じゃあ僕は新しい仮面を買おうと思つてる
けど、どれを買おうか
迷つてるって相談しようかな～？

「ねえ、聞いた？新しい生徒会長の噂」

「私達と同じ入学したての一年のくせに、[冗談みたいに態度エルみたいな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけどやる」となすこと滅茶苦茶に型破りでさ、先生もビビッて手エ出せないそうだぜ」

「しつかし、あのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ。

人前に立つのに慣れてるつーかさー」

「だよねー。めーちゃんは凄すきるよ」

「カツ！ ありやあ、人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのに慣れてんだ！ それより何で罪徒は不知火を膝の上にのせてるんだ？」

さつきから僕は袖ちゃんとずっと自分の膝の上にのせているのだ！

「それは・・・兄弟だから？」

「何で疑問系なんだよ?」

「そんなことより。そーでなきゃ一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

「そーだよね。しかも支持率98%!ぶつちぎりのナンバーワンだしね~」

「かくゆう私と罪徒兄もお嬢様に清き一票を捧げたわけですが

」

「全国模試では常に上位をキープ!偏差値は常識知らずの90を記録し!

手にした賞状やトロフィーは数しえず!スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状体!実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち!」

いいなーお金持ち。新しい仮面がいつぱい買えるじゃん!
あ、袖ちゃんがまだなんか言つてる。

「全長263・0メートル。高さ6万ワードをマッシュで飛行!
インテル入ってる!」

「いや。途中から人類じゃなくなってる」

「あー今思つたんだけど、善ちゃん Bieber さん? めーちゃんが当選したから善ちゃんも
生徒会に入るんでしょ?」

「カツ! なわけねーだろ! これ以上あいつに振り回されてたまるか

つての。

俺は絶対一生徒会には入らない……。」

「…………」「

ガシッ！

「まあ、やうつれなことをいつものままにいへ。善吉よ

「……？」「

「めーちゃんが善ちゃんの頭を後ろからガシッと掴んだ。もつ逃げれないぞ～。善ちゃん。

「おお、罪徒ではないか。どうだ？ 貴様も生徒会に入るか？」

「残念だけじめーちゃん。僕はこれから新しい仮面を買ひに行くんだよ」

ガシッ！

「貴様もやつれなことひいつものままでござ。では、行こひ

「やばいぞ～。僕もめーちゃんに捕まつちやつた。どうしよう……。そうだ！」

「袖ひやん！ 助けて！」

「『』愁傷様。罪徒兄

ひどいーお兄ちゃんは悲しいぞ袖ちゃんーもつ僕に残された選択は・

「まちさん……」

「罪徒」

「一九四九年十月三十日十一時三十分」

書ちゃんと一緒に悲鳴を上げる選択しかなかつたよ。・・・

生徒会室

「…………つたぐ。普通に連れてくねひといじができたーのかよ。生徒会長さん」

「善ちゃんのゆづ通りだよめーねちゃん」

「ふん。私の誘いをすげなくし続ける貴様らが悪い。それによそよ
そしい呼び方をする

「ねえー。めーちゃん。僕帰つてもいい?」

「却下だ」

最悪だよ。早くあの仮面を脱がないと困ったのになってしまったから
「うやんせいだ！」

「つづめーうやんなんで脱いでるのー？」

「あつ、当たり前みてえに人の後ろで着替えてたじやねえよーお前
はもつと恥じらうこと
う概念を持つて！」

「私と貴様らの間に恥じらなど何の意味がある。特に善吉。少な
くとも小六まで私と
一緒に風呂に入っていた男の話つじとははないな」

「話だー！」

「それに善吉。私は仕事を手伝つてもうつために貴様を引き込もう
としている訳ではないぞ。
私に貴様が必要だからそばにいてほしいだけなのだ

「・・・あ。あー？」

やまこしてほしごつて告白しね
わ

「へえー。めーうやんは善吉さんは必要だけど僕の事は必要じゃな
いんだ」「

「拗ねるな。もひりん罪徒も必要だぞ」

「ありがとー」「

「で、やしあたつては田安箱なのだが、先ほど聞いてみたところ早速第一弾の投書があつた」

田安箱かー。ビハシよひへ、僕の悩みも投書しようかな?

「で、どんな内容なんだよ」

「ふむ。読んでやるひつ『三年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困つています。どうか彼らを追い出してください』

だそうだ

「ねえ、善ちゃん。これって・・・・・・」

「罪徒。お前が言いたいことがわかるぞ」

「『巻き込まれる流れだよね? (だ)』

第6話／自分が欲しい物が買える時つて何故か邪魔が入る（後書き）

作「次回いつたい罪徒はどうなつてしまつのだらうか！」

罪「いつたい僕はどうすればいいんだろ？作者のテンションについていけないよ」

作「それでは皆さん次は第7話でお会いしましょう！」

罪「わよつなり～」

第7話／地の分にシッパ//あるつある意味超能力だよね？（前書き）

作「どうもー皆さん」

罪「ヤツホー」

作「投稿遅くなつてすいません。最近は忙しくて、投稿するのが遅くなりました」

罪「そうだねー。最近は棒術の練習で帰るのが6時とか6時半だからねー」

作「それでは皆さん第7話お楽しみくださいー。」

第7話／地の分にシッ！」あるつある意味超能力だよね？

やあー祁答院罪徒だよ。

めーちゃんに巻き込まれて剣道場に行くことになっちゃった

「はやめろ罪徒。気持ち悪いから」

「善ひちゃん。地の文にシッ！」しないでよ」

「貴様ら着いたぞ」

「どうやら剣道場に着いたみたいだね。」

「だから はやめろよ罪徒」

「わかつたよ。やめればいいんでしょ」

「貴様ら静かにしろ。開けるぞ」

ガララララ

「あ？誰だアお前ら」

「一年十三組生徒会執行部会長職黒神めだかだ。田安箱への投書に基づき

生徒会を執行する」

「あー聞いてんぜ。今をときめくイカれた新会長って奴だろ？」こん

などに出てお出でに

なるとは驚きだな！支持率98%だか何だか知らねーが生憎俺らは
残りの2%の方だぜ……」

「貴様がリーダーの門同二年生だな。剣道か懐かしいぞ私も昔少し
だけかじったよ。

」の木刀もよく手入れされてある黒檀とは随分と張り込んだもの
だ

「！？（え・・・あれ！？）つの間に取られた！？感覚どころか気
配も
しなかつたぞ！？」

あれって『無刀取り』だっけ？僕もやってみたいな。

「かつ囲めおめーりッ！…」

「おつおつー！」

「なんで罪徒が不良側の方にいるんだよ！？」

「それは雰囲氣的に面白そうだからに決まってるじゃん」

しうがないから元の位置に戻るか。

「・・・制服改造に染髪、装飾・・・校則違反のオンパレードだな。
まあ、私もあまり人のことは言えんが

なつー？めーちゃんが分身した・・・だと！？

「なツ！？何イイツ！？」

「…………それでも煙草だけは控えておけ、貴様達の健全な成長を阻害する」
何より将来の楽しみがなくなるだー。」

「え・・・オレのタバコー！？」

「な・・・何だ今の一!?」

「忍法か！？」

「しかしあ荒れ放題だな。よくもこゝまで学園施設を荒廃させたものだ
逆に感心したくなる」

普通感心したらダメでしょ。

「なつなんだよセツキョーかよ！」

「お呼びじやねーんだよ念願さんよーーー『』になつてんじゃねー
ヤバアーーー！」

「哀れなことだ」

「ーー？」

「貴様達もかつては真つ直ぐな剣道少年だったに決まっている。何
か重大な理由が

あつて挫折を経験し道を踏み外してしまつたとしか考えられん」

「おお、出た。めーちゃんの真骨頂『上から田線性善説！すげー勘違いだよね。』

「親に見捨てられたか？」

よき師に出会えなかつたか？

友に裏切られたか？」

何故、イナバウワーのポーズを取るんだりつつ、

「安心しろ私が貴様達を更生させてやる。剣のこと以外何も考えられない

ようにしてやる」

生徒会長がそんなことしたらダメでしょ！」

「矯正してやる、強制してやる

改善してやる、改造してやる

改造つてあなたは一体どこの悪の組織ですかー？

「一度とだれかようなどと思えぬよう泣いたり笑つたりできなく

してやる

精神科に連れていかれるよ絶対ー？

「まずは素振り1000回からだ！貴様達、今日は帰れると思つた

よーーー！」

やつと仮面を買ひに行けるよ。みかつたよかつた、よし帰るか。

「罪徒。貴様も素振りをするの」「何故帰らひつとしないでるへ。」

「今から急いで新しい仮面を買ひに行ひ」と申つてゐるんだよ

「問答無用ーー。」

「ギャアアアアア・・・・・・・・」

田口

「善ひやんと袖ひやんと一緒にじまん食つてこぬよ。

「前から思つてたんだけどやー。人吉つてひょつとして頑悪くない
? なんぞ

毎回毎回お嬢様のシゴキに付き合つてゐるんだよ」

「うむせえ。昔つかひぢつかずれてんだよあいつは、自分の優秀さ
にまるで自覚が
なくてそのくせに自分と同じレベルを強要しやがる。
だからあいつには一生かかってもわからんねーんだよ。まあ、今回は
それが
たまたまつまく転んだわけだ。あんなヒテヒ田に遭つちやあいつら
もう剣道場には

近寄りねんだる

「…………ビーダーヴィね?」「

「ああ?」

「人吉つて付き合こ長い割に案外わかつてないよね~」

『『『フルい奴やつけてめでたしめでたし』めーちゃんがそんな力
ンタンな
女の子だつたら善ちゃんも僕もそんなんに苦労しないでしょ?』

「冗談じゃない。めでたくなつてもらわなきや困るんだよ

んつ?今誰か何か言わなかつた?

「んん?今後ろの席に誰かいなかつたか?」

どひゅぢ善ちゃんも聞こえたみたいだ。

「え?うん。同じクラスの田向がうびん食べただよ~ それがどう
したの?』

「……いや。別に……』

善ちゃんも田向君の言つたことが気になるのかな?

「まごーんじやない?もつすぐあんたも罪徒兄もお役目御免なんだ
し』

「あ？」

「知らないの？今日の放課後学園側主催の役員募集会があるんだよ。二年三年の特待生集めてね。生徒会メンバーさえ決まっちゃえばもう人吉も振り回されることなくなるしよかつたじゃんさー！」

僕と善ちゃんは『はん』を食べて一緒に剣道場に向かってることだよ。

「つたく不知火の奴『お嬢様のこと案外わかつてないよね』『だともー?』

善ちゃんさつきからこの調子だよ。

「俺は一歳の頃からずっとあいつのそばにいるんだー！あいつのことは俺が一番わかつてるんだよ！カツ何だか知らねーけど無性にイライフするぜー！」

「善ちゃん剣道場に着いたから中に入るよ

ガラ

「「なッ！何イイー？」」

なんといつことでしょーーー昨日まで廃墟当然だった剣道場がきれいになつていいではないですか！

「遅いぞ善吉。罪徒。稽古開始の時刻はどうに過ぎておる遅れた分帰りが倍は遅くなると心得よ！」

めーちゃんが掃除婦姿で剣道場を掃除していたのか~。

「しかし連中も遅いな最近は時間にルーズな者ばかりだ」

「おっ遅いも何も来るわけねーだろうが!道場掃除すりや連中が心開く
とでも思つたのか!?大体お前なんでここまでしてんだよ。あんな連中お前に
とつちや見知らぬ他人だろ?」

「愚問だな私は見知らぬ他人の役に立つため生まれてきた。順位も記録も
段位もくだらん誰かの助けになれた時だけ私の心は安らぐのだ!」

めーちゃんがそういうことをするようになったのは僕と善ちゃんが
きつかけだつたけ?

「・・・・カツ!羨ましいねどうにもーお前くらい才能に恵まれ
てたら
俺もそんな風に生きたかもな!」

「才能か・・・それも下らん言葉だ」「くだらなくねヒヨー・みんな
それ
がねーからガツついて生きてんだよーー」

まあ、普通はそうだよね。

「大体お前そんな生き方続けてたらいつか絶対痛い目見るぞ!わか
つて

んのか？あいつらはお前の支持者じゃない残りの2%の方だつて

「

「2%ではない8人だ生きてる人間を比率やら割合やらでひとつべつにするな！門司三年生。宇佐三年生。鳥栖三年生。伊万里三年生。指宿三年生。中津三年生。嬉野三年生。湯布院三年生。他の生徒と何ら分け

隔てないこの箱庭学園の誇るべき生徒だ。私は誰の味方でもするし誰のことも見下せない！」

「じゃーもう好きにやつてよービーせ俺は生徒会の人間じゃねーんだし」「

ガラ

善ちゃんが剣道場から出よつとしたら・・・

「あ・・・あんたらなんで・・・」

遅れたけど門司先輩達来たよ。

「別に・・・俺ら他に行くトコなんかねーしヒマだからな。それにろくなしなんだけどよハンパな奴とそーじやない奴の区別くらいはつくんだよ。

つーかこんなボロボロにされて引き下がれるか！言ひとくけど俺ら絶対

更生なんかしねーからなーできるもんならやつてみろコリタツー！」

「やつだやつてみる」トトツ……

「お前は関係ないだろ」の仮面ヤロー……

てか善ちゃんといつのまにかいないんですナビー！

「いいだろ？私は誰の相談でも受けけるし誰の挑戦でも受けれる。では今田は素振り一萬回からだ！あと罪徒は十万回だ！」

最悪だー。ひなつたひ・・・・・

「めーちゃん！門司先輩達も素振り十万回の方がいいって言つてる
よー」

「そりか！なら素振り十万回だー！」

「フタケタ増えたー？」

（善吉 Sirige）

なんだよ・・・・！れじやまるで俺が間違ってるみたいじゃねーか！

（私に貴様が必要だから、そばにいてほしいだけなのだ）

馬鹿てる・・・あいつに俺が必要だったことなんてあるもんか

あいつは気付けば人の上に立ってる奴だった。その圧倒的なパラメーター
ゆえ絶対王政さながらの振る舞いゆえに妬まれながらもやつかまれ
ながらも
清濁併せ飲むその生き様に結局は誰もがあいつを好きにならずには
いられなかつた。たとえ、どんな痛い目を見たとしてもきっとあいつは
意にも介さずそれからも同じように生きていこうのだらう。

本当はわかつてんだよ。聞違つてるのは確かに俺なんだつて・・・
・
・

グシャアッ

「つたぐ・・・ホンシト！アテにならねえ生徒会だよなあ。僕は
追い出せつつって頼んだんだぜ？雑草育ててビリすんだよアホが！」

第7話／地の分にシッパ//あるつある意味超能力だよね？（後書き）

作「最近は早起きもしないといけないからやつこよ」

罪「朝は6時起きだつけ？」

作「やうやつ。6時に起きなこといかなーからやつこんだよね」

罪「まあがんばるしかないと」

作「そうだね。それではまた来週へ！」

第8話／シンホンもここかわクーパーもこことな？（前書き）

作「どうも～作者で～す！」

罪「罪徒で～す」

作「最近タイトルが思いつかなくなつてました」

罪「まあ、がんばって。それでは話題を、第8話お楽しみください

！」

第8話／シントレもじこなびクーラレもじこよな？

やあ、皆のお兄さん罪徒お兄ちゃんだよ

さつきまで剣道場で素振りしてたんだけど、めんどかっただから逃げてきたぜ！ まず素振り十万回つてやばすぞんでしょ。

この曲がり角を通つたら教室だ・・・

「なんで善ちゃんが倒れてるの？ おーこ善ちゃん起きるー・・・

返事がないまるで屍のよひだ

「勝・・・手に・・・・・殺すな・・・

「どうしたんだい善ちゃん。何で頭にケチャップかけてるの？」

「ケチャップじやねえ。後ろから誰かに殴られたんだ」

「善ちゃん早く保健室に行つてきなよ」

「ああ、やうすむよ」

よしー善ちゃんを殴った相手はだいたいわかったから仕返しに行か。

「つたくよ～、高校じゃいい子ちゃんで通したかつたんだけどナ～

「だ・・・・誰だお前・・・・?」

「僕? 僕は真面目な一年生ですよ。真面目に剣道がしたい真面目で
真面目な
男です」

日向はそう言いながら不敵に笑みを浮かべ、木刀に付いている血を拭う。

「だけど聞いてくださいよ僕、団体行動とか上下関係とか苦手でし
てね、先輩とか

顧問とかと揉めていつもボロつけやつんですよ。それで試合出れ
ねーの」

「くっ・・・だから剣道部が休部中のこのガツンに来たってわけか・
・・・

「ピンポーン　ijiでなら一人で好きにできますからね。でも計算
外! 立派な剣道場に
は招かれざる先客が! ! だから、例のバケモノ女こと生徒会長に草
むしりをお願いしたん
ですけど、いやいやうまく運ばねーもんですねえ! あ、助けを期待
してんならムダですよ。

あの女今頃役員募集演説の真っ最中ですから　しつかしこんなに

キレーに掃除して

くれたのは助かつたかな？立つ鳥跡を濁さずつスね

「…………待てよ……勝手なこと吠えてんじやねえよ、た
つた今思い

出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ！…」

門司は竹刀を田向に突き向けて言い放つ。その言葉を聞いた他の不
良達も、

立ち上がる。

「あー俺もそうだった

「そーいや俺も

「俺も」

「俺なんか日本一の剣士を目指してた……気がする」

「…………うつぜードロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろ
うと
してんじゃねーよー剣道三倍段つて知つてつか！？僕はあんたらの
三倍強いつ
て意味だ！！」

そう言つて田向は木刀を振りかぶり不良達に振り落とさうとした・
・その時

ガシッ！

「 もうやけにへんこしたらどうだい田向君?..」

「 もう…罪徒!へつ…やつぱお前は妨害すんなのな 「

「 そんなわけないじやん。僕は先輩達が立ち上がりなかつたらまつとくつもりだつたんだけどね」

「 ああ!?.だつたらスッこんでろよー学園施設を不当に占拠してゐる雑草どもをむしつてやつてんだ僕は正しげだらうがあアン!?.」

「 ……確かに田向君は正しこり…だけどめーちゃんが善ひやんの方があもつと正しい。僕は善ちゃんみたいにめーちゃんと悪く困たわけじゃないから、何処までが正しこのか分からぬ。けど、強さを振りかざして人を脅迫は絶対正しい!もしも君がめーちゃんや善ちゃんの正しさを否定しようとするならそこには僕が許さない!..」

「 ……ケツお前が許さねーからなんだつつーんだよーどこつもこいつも面倒くせえ! お前ー剣道三倍殴つてつか!?.」

僕は拳を握りしめ田向を殴つた。

「 知るかつ!」

よしー終わった!終わった!後はめーちゃんに任せて僕は新しい仮

面を買いにでも
行くとするか。

「・・・なんで」

「?..どうかしました?」

「なんで俺達を助けてくれたんだよ・・・」

「んー・・・先輩方が改心したからかな?人を助ける理由なんてなんとなくでいいじゃないですか。僕は善ちゃんの仇を打ちたかっただけですか。じゃあ僕は帰りますんで」

～後日談～

その後、どんなやりとりがあつたものか剣道場はみんなで仲良く使うことになった
みたいだ。剣道部（仮）とこうじで、なんと一田向君が指導を務めているらしい、
ビックリだ！まあ要するに、田向君もめーちゃんのことを好きになってしまったんだ。

会長就任後、ほんの数日でのそんな顛末は、善ちゃんを決心させるには十分だった。

「ねえめーちゃん。何なのこの花昨日まであったたけ?」

「つむ。これから生徒会業務を行つ上での指針としてな、案件ひとつ解決する」と、

花を一輪飾りうと考えた。とりあえず一輪だ

「は、女の子らしこともあるじゃねーかよ。失敗した時はどうすんだ? 枯らすのか?」

いやいや。善ちゃん枯らしちゃダメでしょ。

「失敗などしない、しても数えない。いつか見渡す限り一面に花を咲かせるのが、

私の夢だ!」

「でつ、できんのかねそんなこと。お前が募集会ブツチつたせいで結局役員は

一人も増えなかつたそつじやないか!」

「構わんさ。もとより私は、貴様らを置いて他の誰かと組む気はない

い

「でも、なんでめーちゃんは善ちゃんや僕にこだわるの? それ以前に、僕達は門司先輩達と同じ他人じゃないか

「

「おかしなことを言つものだな。私は貴様らを他人と思つたことなど生まれて

このかた一度もないぞ。貴様らのことは私が一番よくわかつてある

し、私のことは

貴様らが一番よくわかつておるのだからな！」

「僕と善ちゃんのことを一番よくわかつておるだつて！？なら僕がどんな仮面が好きなのかもわかるのかな？」

「善吉は一歳の頃からずっと私のことを心配してくれている。罪徒は一歳の頃と中学生の頃から私のことを支えてくれている。貴様ただけが今でも変わらず私のことを守つてくれている。そんな貴様らがいるからこそ私は安心して他人のために動けるのだ……」

「…………どれでもいいや、その腕に巻いてるヤツ一個よこせ」

「…………どういふ意味だ？」

「…………、振り回されてやるひつてんだ……気が氣でなくて見てらんねーんだよ、やりやーーーんだろーがやりやーー俺がこの箱庭学園をお花畠にしてやっから、わっせよーせーー！」

「僕もこの箱庭学園をお花畠にするのを手伝うけど、役職は生徒会補佐でいいかな、めーちゃん？」

「…………ふん、ひねくれ者め、それにしても貴様ら随分氣を待

たせてくれたじゃな

いか。しかしあ、一応礼を言つておひづ。・・・・・ ありがと
おつ！！

そういうつまづきでめーちゃんは僕と善ちゃんに抱き着く。

「そう、これがめーちゃんの真骨頂その？『ツンデレ』でも、僕はツンデレもいいけどクーデレがいいな。」

「あ、でもちゃんと庶務からなのな」
ドンケツ

「手柄を立てて這い上がれ！」

よし、生徒会補佐になつたぞ！生徒会に入るのもこれで二回目だよ。

第8話／シンヒレもいにかどクーテレもいによね？（後書き）

作「シンヒレもいにけど自分はクーテレがいいなー」

罪「僕もクーテレかなー」

作「それでは皆さんまた来週〜」

罪「バイバイ〜！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558x/>

仮面をついている男

2011年11月26日20時51分発行